

野ネズミ対策は殺鼠剤散布よりも 自然界の食物連鎖の利用を

●
原島 和子
(札幌)

札幌に住み始めて20年近くになります。当初北海道を知ろうと思い、ツアーや個人で道内の東西南北を歩きました。いつも不思議だったのは、山や平地の森林が豊富な場所であっても、鳥の鳴き声や姿がない場所があることでした。

殺鼠剤のリン化S・1やリン化亜鉛が、散布前後の野生生物棲息環境調査もされずに国有林で空中散布されていると知り、林野庁、北海道森林管理局、道庁と殺鼠剤の空中散布について5年前から話し合ってきました。

2013年に殺鼠剤の農薬登録が切れるが、薬剤メーカーが登録更新するには費用が多額なので、北海道知事は補助金を出すと2011年に道議会で述べ、森林所有者が必要な場合には殺鼠剤散布の支援の意向を明らかにしました。私は、生息している野生生物に多大な悪影響があるので、役所が行う殺鼠剤散布を中止するよう要請してきました。しかし、森林管理局は「各農薬メーカーが、毒性や残留性といった安全性などに関する試験成績書や農薬見本を国へ提出し、これを(独)農林水産消費安全技術センターが検査し、農林水産大臣の登録認可を経て使用が認められた」ことを根拠にして、「ずっと使い続けているので安心な薬剤です」と答えるだけで、森林管理局と薬剤メーカーは、当然のように薬剤散布を続けており、見直すような姿勢はまったくありません。

殺鼠剤空中散布によってネズミ以外の野生生物が直接被害をこうむるだけでなく、殺鼠剤で死んだネズミを食べた生物が間接的に被害をこうむることもあります。殺鼠剤は鳥類に対しても毒性が強く、殺鼠剤の利用状況、そしてその影響は実はあまり調べられていないのが実情です。

2011年11月の朝日新聞に掲載された「生態系を損なう野鼠駆除を見直せ」と題する記事を投稿した農家の方は、地域総出で野ネズミの巣穴に毒の餌を入れてネズミ駆除をした翌日に、毒餌を食べて死んだネズミを食べて苦しみながら死んだ狸を見たという経験を述べ、野ネズミの天敵であるフクロウ、イタチ、青大将などへの影響や野ネズミの穴で越冬するトマトやメロンの交配に重要な野生のマルハナバチなどへの影響は計り知れなく、野ネズミの薬剤駆除による環境破壊の作業はぜひ全国的に見直してほしい、と訴えています。

動物写真家宮崎学氏によると、フクロウ1羽が1年間に食する野ネズミの数は2,700匹ということです。フクロウがいるだけでもかなりの駆除効果があり、これが自然界に備わっている生息数を自ら調整する仕組みだと思います。小笠原や石川県の河北潟干拓地ではチュウヒなどの猛禽類がネズミの天敵として注目されています。エゾフクロウの子育てを撮影した知人は、親はかなりの数のネズミをヒナに与え、ヒナは丸ごと飲み込んでいた、と話していました。したがって、野生の動物たちに野ネズミを捕食させれば、野ネズミの生息数が減少するわけですから、野ネズミの被害を押さえることができるのではないかと思います。むしろ、殺鼠剤で野ネズミの天敵を減らしたり、撲滅して、野ネズミを蔓延させることになれば、いつまでも殺鼠剤を使い続けなくてはならなくなるばかりか、被害が拡大するばかりとなり、考えて見れば、人間側の無知が野ネズミを増やし、被害を拡大させてきたのではないかと思います。「製薬会社から殺鼠剤を買って、野ネズミを殺し、その結果、天敵を撲滅して、野ネズミを増やし、野ネズミの被害を拡大させて、さらに製薬会社から薬を買ってまく…」この仕組みは製薬会社の殺鼠剤の生産販売を増やすばかりで、片や被害拡大の構図ではないでしょうか。昔は益鳥、益虫とかの言葉があり、「自然の抑止力」をうまく活用していました。

過去に散布の仕事に関わった知人は、「現地でマスクをし、手袋を使用し、手洗いやウガイもし、水源地の近くでの散布を控えるなど人間生活に配慮していると言うことは、野生動物たちには安全だ、などと言うことはできません。取扱注意の毒

薬に間違いありません。」と話して下さいました。

殺鼠剤の空中散布に頼らなくても、雑種カラマツ等の耐鼠性品種の木々を植えたり、造林地の周りの草刈や清掃で清潔な環境にしたり、防鼠溝を掘ったり、シャーマントラップなどの獲り罠による捕獲や、樹にネズミが齧れない金属を巻く方法もあります。

野ネズミ対策は永遠に続けなければならない薬剤散布よりも、自然界の食物連鎖を利用し、自然界に備わっている生息数調整の仕組みを利用した対策を取り入れることが必要だと思います。ましてや、国家戦略である生物多様性保全計画があるわけですから、殺鼠剤一辺倒の野ネズミ対策は今こそ早急に見直すべきでしょう。

役所は生物多様性を謳っていますが、野生生物に多大な悪影響のある殺鼠剤散布をどうすれば中止していただけるのかを模索中です。